切ない恋をしていました。

水沢ちぬあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
切ない恋をしていました。

【Ｎコード】
Ｎ３９５４Ｒ

【作者名】
水沢ちぬあ

【あらすじ】
私の絵を「上手いね」って言ってくれた、貴方のことが気にかかります。これは絶対恋じゃない。絶対。いや、でも、やっぱり恋かも。ちゃんと起承転結なってない気がします。でも書きたいものが書けた気もします。好きな人の幸せを願う前に好きな人が欲しい私。

絵を描くのが好きだった。
風景から動物、漫画のキャラクターやデフォルメ、色々描いた。
小さなスケッチブックに思いついた時に描き溜めして、友達に見せたり、同じように絵が得意な友達と、描き合いっこしたり。
小学校の時から、高校に上がっても、ずっと、ずっと。
漫画家やイラストレーターなんて道もあるかな、なんて、夢見たりしていた。
実際、誰よりも上手く描けている自信もあった。

「上手いね」
その一言。
いや、笑顔だったのかもしれない。
そう言ってくれた君に、胸がとくんと脈打った。
放課後に、とある男子にスケッチブックを取り上げられた。そいつは許可も取らず中を見て、「うわ、すげー！」と言って騒いだ。
教室にはそいつと私と二人だけだったのだけれど、そこに彼が、忘れ物を取りに入ってきた。バスケ部のユニフォームを着ていた。
ああ、私よりちょっと高いくらいなのに。バスケ部なんだ。
同じクラスなのに、会話もしたことがない彼は、私の絵を覗き込み、上手いね、との一言。
「ありがと」
私が笑って御礼を言うと、忘れ物のタオルを手に掴み、部活へ戻って行った。
颯爽と吹く疾風のようだ。
そんな事を考えていた。

この感情が俗に言う”恋”というものだと、認めたくなかった。

何故だろう。昔から私は頑固だと言われていたけれど、この頑固さはどこから来るのだろうか。
というか、高校1年秋。これまで恋愛を経験したことは、無い。異性と付き合った事はあるけれど、相手が一方的なだけで、私は好きじゃなかったから。
なんだか彼の事を考えるとモヤモヤする、と東京にいる姉に電話口で話すと、
「お前もやっと恋したか〜」
としみじみ言われて咄嗟に「絶対違うってー」と否定した。認めるには早すぎると判断していた。
姉は中2辺りから彼氏がいたような記憶がある。それ以降5人とかそれくらいの男と、順繰りに付き合ってきたのではなかっただろうか。曖昧な記憶だけれど。
まあ、私の心情が姉に分かって私に分からないというのは理に適っていないので、私は私の気持ちを押し通すことにした。
これは恋ではない、と押し付けてみた。

総合文化祭。特に大したイベントもなく過ぎ、例の件があってから一ヶ月経って、”恋もどき”の感情は薄れつつあった。
そうだ、こんな世間様にも出せないような顔に”恋”だの”愛”だのという清廉潔白な言葉など似合わない。
友達に薦められた漫画を読んで、そのキャラクターを好きになってみた。
当然というか、二次元の美青年美少女の恐ろしさは計り知れない。その事実はこの頃に知ったと思う。
でもその時期はクラス内の女子同士の敵対があったり、妙に居心地の悪い雰囲気になる時期でもあったけれど、それはそれで夢でも見ているかのような毎日だった。
今思い返せば、もう二度と見たくない悪夢の日々になっているけれど。

年が明けた。年越しはただただ田舎、山の上の上にある父の実家でゆるりと過ごし、始業式に学校へ。
3学期ともなると、「君らは上級生になるんだ、後輩が出来るんだ」「もう立派な大人なんだからしっかりしろ」と、担任がうるさい。耳が痛くなるほどだった。
そんな時、彼との接触が多くなった。
少し席が近くなってみたり、授業の実習で班が一緒だったり、なんだか気付けばそこにいるような感じ。
秋に感じた胸のモヤモヤが、思い出したようにひょっこり現れ始めた。
ここ教えてくんないかな？　あ、そこ間違ってんじゃん。　ねえ、このノート一緒に出しといて。　そっち違うから。以外とドジ？　なんか第一印象と全然違うな、話してみると。
そんな事を言われた。話す度に浮かれる自分を見つけて、どうにもこれが”恋”じゃないと言い切れなくなってきていた。
それでも姉には「違うから」と言い続けてきた。いつ転換しようかとは考えていたから、もう諦め半分に”恋”だと認め始めてはいたのだろう。

ある放課後。
友人二人と、私と、彼が教室にいた。
片方の友人が彼に問う。
「ねえ、好きな人いるって、ちょっと聞いちゃったんだけど」
「うそっ、マジで？」
もう一人も乗ってくる。私も興味深げに彼を見た。
彼は照れたように顔を背けて、少し唸って逡巡したが、頷いた。
うん、いるけど。
え、どんな子？　同じ学校？　友人も私も、合わせて問い質す。
女子の好奇心は留まることを知らない。

彼は、ただ一言、隣の県の名前を口にした。そっちの学校の子で、バスケの大会で知り合い、好きになったとか。
少し期待していたかもしれない。落ち込むのは分かっていた。
私は焦燥や苦痛を隠す事には長けていた。と、思う。我慢強いというか、ちょっとやそっとの事じゃ動じない。
笑ってみた。
笑えたと思う。
貴方には好きな人が居ます。その相手には他に好きな人が居ます。貴方は応援してあげられますか？
経験するまでは「とりあえず自分の気持ち伝えたいよね」とかほざいていたどっかの誰かさんは、心の奥の奥へ逃亡し、臆病な私が残った。
「遠距離とかすごいじゃん、頑張ってよ！」
その言葉は無意識だった。

好きな人が幸せなら、それでいいと思った。
というか、他に好きな人がいると聞いて、安心していた自分も発見。姉に「恋なんてしてない」と主張する材料が出来た。
それに、恋なんて実ったら後が大変。デートして、プレゼント渡し合って、ケンカして、苦しんで、悲しんで、嫉妬して、寂しくなって。
楽しいのが好き。だからいいや。そんな大変な事なんて面倒なだけだし。
どうか、彼が幸せになってくれることを願おう。
ケータイのアドレス帳を開き、彼のアドレスを探して、削除のボタン。
寸前で思いとどまる。
やっぱり消せない。
あれ、何で消そうとしたんだろう。
きっちり振られたわけでもないし、……別にいいや。

彼の事が好きだと、誰にも話していなかった私。
どれくらいの人が気付いていただろう。もしかしたら誰も気付いていなかったかもしれない。
私の恋。儚い恋。あぁあ、なんだかくるしくなってきた。
卒業式の日、先輩を涙で見送って感傷に浸る放課後。
教室にぽつんと一人、スケッチブックを広げて考えを巡らす。
ああ、そうか。
この気持ち、伝えても、伝わらないんだ。
こんなに大きな気持ちなのに、「好き」の二文字でしか表せないんだ。この気持ち。
君に伝えても、君の気持ちはあの子に向いてる。
初めて、切なくて涙が出た。
そっか、私、切ない恋、してるんだ。
知らなかった。

2年生に進級しました。後輩が出来て浮き足立っています。
入学式の前日、彼のブログに日記が更新された。
”恋人が出来ました。
想い続けててよかった！
幸せです。”
自分の頬が、ふっと緩んだのに驚いたけれど、そうだ、私は本当に彼の幸せを願っていたんだ、と新しい自分にコンニチハ。
おめでとう。
そんなコメント。
指が震えていたのは、気のせいだろう。

スケッチブックには、想像だけれど、貴方と貴方の恋人を描いた1ページが追加されました。
二人とも、幸せそうに笑っています。その笑顔は、もうこれから

先、このページから永遠に消えることはありません。
どうか、あなたのその恋が永遠でありますよう。

（後書き）

目に留めてくださってありがとうございました。
こんなへなちょこの作品を…よろしければ他の作品も。とか言ってみたり。
読者様から反応があるとダッシュで地球一周できるくらい嬉しいものです。
感想やアドバイス、ここが駄目！　とか、下さったら有難いです。
誹謗中傷は抜きで…

こんな純粋な恋がしてみたいッ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3954r/

切ない恋をしていました。

2011年5月16日22時25分発行